

## ヨーロッパにおける柔道の普及と発展（フランスの柔道教育システムを中心に）

大竹 雄介

### はじめに

私は、東京都高体連柔道専門部に属する、中学校・高等学校体育科教諭である。教育現場において、生徒や保護者に「柔道が危険」というイメージがあることで、部員減少に歯止めがかからず、この危機的状況を打開するために、柔道に対する安全指導の方法などを試行錯誤し、日々過ごしていた。

試合に出られる、投げたらカッコいい、黒帯を巻ける、初段は履歴書にも書けるなど、生徒にアプローチをしてきた。しかし、投げる様子を見せると、投げられた方に目線が行き、痛い、怖いというイメージを持たれる。資格を取れたらいいが、英語検定試験などのように、進学や就職に直結するものとは違うと捉えられ、関心を持たせるのは困難であった。

文化祭では、柔道をしている子どもたちに経験の場を提供できたらと思い、毎回 200 名の小中学生に大会を開催した。授業では、年度の終わりに、三多摩柔道会から昇段審議委員の先生方に来校頂き、昇段審査を開催し、毎年 20 名程度の一般生徒が昇段した。

しかし、子どもたちが柔道に積極的に取り組む発想には至らぬことから、この度、柔道人口の多いヨーロッパの柔道界が、どのようにして成り立っているのかを教員目線で「学ぶ」為に、1 年間渡仏した。